

週間ダイヤモンド 今週の一冊

北村行伸

平成12年12月2日号

「パラドックス！」

林晋（編著）

日本評論社 2000年7月31日刊

この世の中はパラドックスに満ちている。つい先ごろ行なわれたアメリカ大統領選挙は、空前の大混乱に陥ってしまった。これだけ科学技術が進み、マスメディアの目も光っているはずなのに、再集計のたびに得票数が異なり、おまけに最終的な不在者投票が届くまでには選挙日から10日も要するということが明らかになった。大統領が問題なく11月7日に選ばれていたとしたら、その不在者投票には何の意味があったのだろうか。民主主義のチャンピオンのようなポーズをとっているアメリカ合衆国の制度が、そのような死票を生み出しているということ自体、パラドキシカルである。さらに言えば、どちらかといえば政治や経済の中心から外れたフロリダの一つの郡の選挙結果に大統領の選択が託されることになったこともパラドキシカルであるが、大騒ぎしているアメリカ国民の50%は選挙に行っていないということが、最も大きなパラドックスである。

もちろんパラドックスは選挙に限ったことではない。経済学者が同じ経済現象を見ても、ある人は景気が着実に回復しているといい、ある人はあと一段の景気の低下があるという。金融政策も景気の回復に呼応して、ゼロ金利からの解除が望ましいという理論も立てうるし、景気が回復しても今しばらくゼロ金利を維持した方がいいという理論もありうる。その上、このように異なった主張をする経済学者達が仲良く飲み屋で話し込んでいる姿を他の人が見たら、誰を信じていいのかわらなくなるかもしれない。そして、経済学者達はそれに対して大した違和感を持っていないことを知ったらどうだろう。

世の中にある様々な矛盾や不思議を、数学者、哲学者、経済学者、社会学者、物理学者がパラドックスの形で紹介し、その解決策について解説を行なったのが本書である。著者の顔ぶれからも明らかなように、本書は上述のような社会経済現象におけるパラドックスを簡単に解決してみせるというハウツーものではない。しかし、同時に理解不可能な数学や哲学の議論が展開されているわけでもない。門外漢にもそのエッセンスが解るように丁寧に書かれているので心配無用である。

実は20世紀において最も重要な発見の幾つかが、ここで論じられているパラドックスに関係しているのである。すなわち、アインシュタインの相対性理論は本書の「双子のパラドックス」「シュレーディンガーの猫」「タイムトラベルのパラドックス」と深く関わっているし、コンピュータ言語の基礎になった、ヒルベルトの数学の形式的体系の試みと、それを見事に打ち砕いたゲーデルの不完全性定理への道程は「集合論のパラドックス・うそつきパラドックス」「形式化と無矛盾性証明のパラドックス」で明らかにされている。経済学やファイナンスで重要なリスクに対する考え方を発見する契機となったのが「セント・ピーターズバーグのパラドックス」であり、経済学者が同じ経済現象に直面して、全く異なる理論を持ち出してくることは、「ヴァイトゲンシュタインのパラドックス・代議制のパラドックス」を読めば、少しは理解できるだろう。無限という概念のもつ不思議さは「ア

キレスは亀を追い抜けないのか」「バナッハ-タルスキのパラドックス」から伝わってくるはずである。

思想史上、20世紀は不完全性定理や複雑系を発見することによって、唯一絶対で無矛盾な理論は確定できないが、また逆に、複雑に見える現象が実は簡単な関係の繰り返しから生み出されていることに気づいた時代であった。本書の中で大澤真幸氏が書いているように、「カオスの縁」にある複雑な秩序こそが社会システムの本質であり、だからこそパラドックスに満ちているといえるのである。

とにかくこの世はパラドックスの世界なのだと割り切って、パラドックスの構造について思いをはせてみてはいかがでしょうか。